

ISSJ

ニュース

日本国際社会事業団（ISSJ）は、社会の中で構造的に弱い立場に置かれがちな人々が、生まれ育った環境や国籍などによって不利な状況に置かれず、自分らしく生きられる社会を目指しています。

子どもが家庭で育まれるための 養子縁組支援



- ・家庭を必要とする子どもへの支援
- ・養親希望者の相談・支援
- ・子どもを育てられない実親への支援

外国とつながりのある家庭の支援



- ・子どもの国籍取得支援
- ・面会交流支援
- ・日本で暮らす難民の支援

社会福祉法人日本国際社会事業団（ISSJ） 〒113-0034 東京都文京区湯島 1-10-2 御茶の水 K&K ビル 3F Tel: 03-5840-5711

ISSJ ニュース（インターカントリー No.52）目次

- **特集：ISSJ の養子縁組**
最近の 10 年間の傾向について (p.1-2)
- **ドイツからのルーツ探し** (p.3)
- **REPORT** アメリカ・研修報告 (p.4)
- **What's New?**
養子縁組をした家族から / かつての難民申請者から (p.5)
難民コミュニティ支援 / パレスチナ訪問紀 (p.6)
カンボジア寺子屋 / 川崎フロンターレ (P.7)
- **スタッフ紹介 / イベントのお知らせ** (p.7-8)

特集

ISSJ の養子縁組 ～ 最近の 10 年間の傾向について ～

昨今、養子縁組をめぐる議論が活発化しています。今号ではISSJが実施した養子縁組について過去10年間のデータを示しながら傾向を紹介し、今後の動きについて検討します。

養子縁組の現状

現在、虐待等を理由に社会的養護が必要とされる児童は全国で4万8千人にのぼります（厚生労働省平成25年度児童養護施設入所児童等調査）。要保護児童の措置件数を見ると、乳児院と児童養護施設の入所割合は69・3%であるのに対し、里親等（ファミリーホームを含む）委託率は11・2%にとどまり、家庭養育の機会を得ている子どもの数は依然として低いのが現状です。

日本には特別養子縁組という制度がありますが、6歳までの子どもを対象としており、学齢期となった子どもの養子縁組がすまない現状があります。また、施設や里親側の事情で、きょうだい揃って同じ家庭に養子縁組ができるケースは決して多くはありません。そうした中でISSJでは、より多くの子どもたちが家庭で育つ機会に恵まれるよう、海外の養子縁組候補者も視野に入れた養子縁組を行ってきました。

ISSJの養子縁組では8割が男児

きょうだいでの委託も

2006年～16年の10年間で、ISSJに委託された子どもたちは24名。すべて児童相談所から照会を受けたケースでした。子どもたちの国籍は23人が日本国籍で、1人は無国籍でした。委託時の年齢で最も多いのは7歳、平均年齢は4.7歳。ISSJに照会される時点で年齢が高めという傾向があります（図1）。

図1 子どもの年齢(委託時)



特集：ISSJ の養子縁組～最近の 10 年間の傾向について～

ISSJ では、きょうだいで養親家庭を必要としている場合、状況が許す限り同じ家庭での引き取りをめざしています。きょうだいで委託されたケースは 10 年間で 3 ケース、3 人きょうだい 1 組と 2 人きょうだい 2 組でした。なお、委託された子どものうち 8 割は男児でした（図 2）。

国内委託を優先

子どもたちが日本国内に住む養親に委託されたケースは 15 件、国外の委託は 5 件で、国内委託が 7 割近くにのびりました。ISSJ が委託をする子どもは日本に暮らしており、子どもの負担をできるだけ少なくするために、国内での委託を優先しています。しかし、子どもが家庭で育つ機会をより幅広く見出すために、日本国

図2 子どもの性別

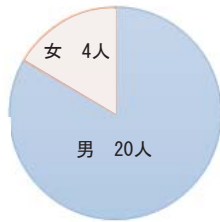
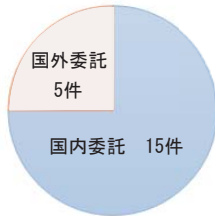


図3 委託件数



外への委託も検討対象としています。養親の国籍はアメリカ人夫妻が 13 件と最も多く、ヨーロッパやカナダの国籍をもつ夫妻、どちらかが日本国籍をもつ夫妻等への委託もありました。

最近では国内および海外在住の日本人夫妻からの問い合わせが増加しています。ISSJ では長年、原則として養親となる者と養子となる者との国籍が 2 か国以上にわたる国際養子縁組を中心に実施してきました。しかし、問い合わせ件数の増加もふまえ、2 年前から日本人夫妻に日本人の子どもを委託する取り組みを始めました。

子どもたちをとりまく環境の変化

子どもをとりまく環境も、10 年間で大きく変化しました。児童虐待の相談対応件数は 1 年間で 10 万件を超え（平成 27 年）、乳児院や児童養護施設では虐待を理由とした入所が増加しました。また、知的障がいや発達障がいをもつ子どもの割合も増えていきます（厚生労働省平成 25 年度調査）。養子を希望する夫婦が増加傾向にあることは評価できる一方、多くの養親希望者は健康な赤ちゃんを迎えることを想定されています。複雑な背景をもつ子どもたちを受け止められるよう、子どもたちが生まれた背景や育った環境、障がいに対する深い理解を後押ししていくことが重要と感じています。また、委託後も継続的に養子と養親を支援する体制を整えることが大切だと考えています。

公的機関と民間団体のつながりの強化を

昨年 5 月、改正児童福祉法が成立し、新設された第三条の二では、国および地方公共団体の責務として「児童を家庭及び当該養育環境において養育することが適当でない場合にあっては児童ができる限り良好な家庭的環境において養育されるよう、必要な措置を講じなければならない」と明記されました。さらに昨年 12 月、養子縁組支援の質を確保し子どもの福祉を守ることを目的として、民間の養子縁組団体を許可制とする議員立法「民間あつせん機関による養子縁組のあつせんに係る児童の保護等に関する法律」が成立しました。これらの法制度の動きにより ISSJ の養子縁組支援が受ける影響も、注意深く見ていく必要があります。

今年 ISSJ では福祉保健機構（WAM）の助成を受け、公的機関と民間あつせん団体の連携について検討するために、東京と大阪で計 3 回の会議を開催しました。参加いただいた児童相談所や児童福祉施設職員からは、民間団体の養子縁組の取り組みを知るよい機会になった、これまでほとんどこうした機会がなかった、という意見が寄せられました。要保護児童の家庭養護促進のためによりよい実践に取り組み、相互に理解を深めていきたいと考えています。（榎本）



2017年2月に都内で開催した会議の様子。各地から多くの関係者にご参加いただきました。

ドイツからのルーツ探し

ISSJでは養子縁組後の支援のひとつとしてルーツ探しのお手伝いをしています。再会をはたした親子のストーリーをご紹介します。

2015年10月、ISSJはISSドイツ支部からドイツ在住の男性のルーツ探し支援の依頼を受けました。ISSJは1976年に当時1歳だったこの男性を日本在住のドイツ人夫妻に委託をし、養子縁組の支援をしていました。この男性はすでに養親を亡くし、現在はドイツ人の妻と4歳の息子と一緒にドイツの北部で暮らしています。もしかなのであれば、実の母と兄に会ってみたい、というのが男性の願いでした。

まずISSJは保管されていた児童調書を英訳し、ドイツ支部を通じて男性に送付しました。男性は、この児童調書には彼が養親から伝え聞いていなかった事実も記されていた、と喜びました。なぜ、実の母が養子縁組という選択を取らざるを得なかったのか、という理由をISSJの記録で再確認した男性は、実の母との再会を強く望み始めました。そこで、男性の依頼を受けたソーシャルワーカーは母の居所確認を行い、母に男性からのメッセージを預かっているのぜひご連絡をください、と記した手紙を郵送しました。

母の自宅には電話がなかったため、母は親しい友人を介しISSJに連絡を返してくれました。しばらくして、母は友人に伴われてISSJに来所し、男性を養子に出した後の自身の半生とすでに他界している男性の父の半生を語ってくれました。ソーシャルワーカーは母が語った内容を記録にまとめ、母の写真と母から預かった父の写真を添えて、男性に送付しました。

母からの写真と母によって新たにもたらされた情報をISSJから受け取った男性は、母に会いに来日したいという思いを強くしました。母も、

男性が訪ねて来てくれるならぜひ再会したい、と応じました。

2016年11月、男性は妻と息子を伴って来日しました。

ISSJの事務所所で再会をした男性と母は、手を取り合いながら再会を喜び合いました。幼少期をアフリカ、ヨーロッパ諸国でも過ごした男性は、英語も流暢です。ソーシャルワーカーは通訳もしながら、男性と母親の交流をお手伝いしました。

翌日、ソーシャルワーカーは母、男性と共に男性の長兄（母の長男）に会いに出かけました。長兄も弟との再会を心待ちにしていました。兄は弟の存在を戸籍から知っていたものの、弟について何も知らされていなかったそうです。しかし兄と弟は少年だった頃、同じようなハードロック音楽を好んで聞いていたこと、スポーツ観戦が大好きなことなど多くの共通点を見出し、お互いに親近感を覚えたようでした。

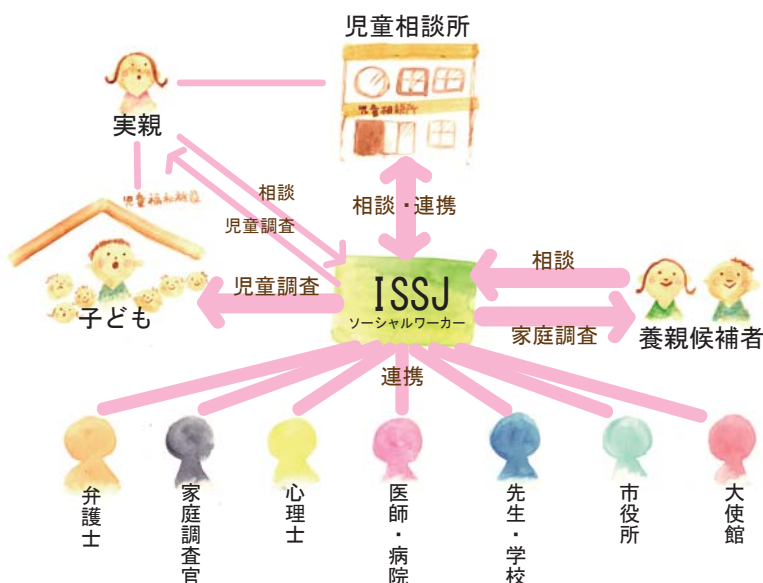
別れ際に、男性がまた母に会いに来日することを約束すると、母はまた息子に会える日まで、元気で過ごすことを約束しました。

（大場）



養子縁組成立までのISSJの役割

児童相談所や児童福祉施設をはじめ、多くの関係機関との連携のなかで養子縁組手続きを行ないます。養親登録から委託、裁判手続き完了までは、多くの場合単位のプロセスとなります。

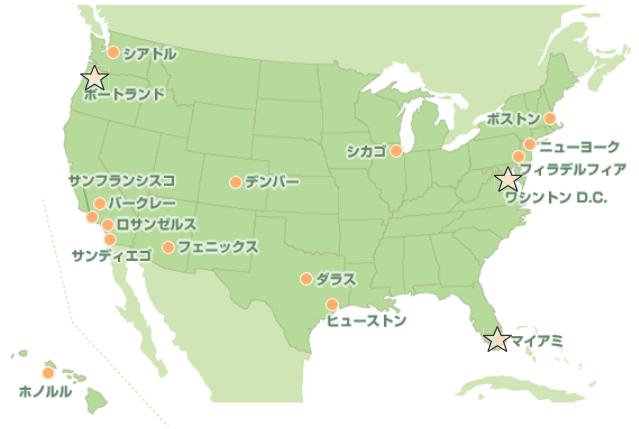


REPORT



面会交流支援 研修報告

—米国国務省主催
インターナショナルビジターリーダーシッププログラム参加—



2016年12月4日から10日間、アメリカ国務省主催のインターナショナルビジターリーダーシッププログラム（IVLP）にソーシャルワーカーの榎本が参加しました。このプログラムは、米国国務省が1940年から実施している人材交流プログラムで、職業上の関心事項についてアメリカの専門家と直接意見交換する機会を提供し、その分野に関するアメリカの現状とその背景、将来性について、理解を深めることを目的としています。

今回のプログラムは、ハーグ条約（国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約）の実施をテーマにしたものでした。日本から参加したのは、離婚や面会交流等の実務に取り組み弁護士や臨床心理士、大学教員、そしてソーシャルワーカーの10名。10日間という限られた期間ではありましたが、ワシントンDC、マイアミ、ポートランドにある様々

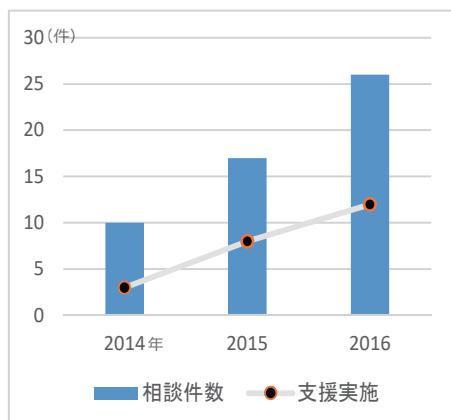
ISSJの面会交流支援



ISSJでは、国際結婚が破綻した場合に、親子が面会交流の機会を得られるように支援をしています。

日本が子どもの奪取に関わるハーグ条約に署名・発効した2014年以来、ISSJでの相談件数は増加しています。2016年度も欧米諸国やアジアの国在住の方から相談が寄せられました。

ISSJ過去3年間の
面会交流相談・実施件数



な関係機関を訪問し、アメリカの裁判制度や家族法、離婚や親権、面会交流、家族再統合に関する専門家（判事、弁護士、心理専門家やソーシャルワーカーなど）との意見交換を行いました。

ワシントンDC郊外にあるNational Center for Missing & Exploited Children (NCMEC)※では、家族の再統合が子どもの心理にどのような影響を及ぼすのか、子どもが抱えるトラウマや、どのようなセラピーを行っているか、専門家から現場での経験を交えた話をうかがいました。子どもの頃に父親に連れ去られ、その後母親のもとに戻った経験をもつ当事者の貴重な声も聞くことができました。

このプログラムへ参加したことにより、アメリカだけでなく日本の実務者同士の新たなつながりもでき、各分野の専門家から様々な視点を学ぶことができました。国際離婚やハーグ条約にかかる面会交流等の支援に役立てていきたいと考えています。

（榎本）

※ NCMECとTeam HOPE

NCMECは1984年に設立された米国の非営利団体で、行方不明になった子どもや性的に搾取された子どもなどの問題に関する国の情報センターとしての役割を果たしています。法的機関や心理士などの専門家と協力し、インターネットやホットラインで相談を受けており、失踪児童の発見や誘拐・性的虐待を受けた児童・家族を支援しています。その中の活動の一つとして、Team HOPEがあります。メンバーはみな誘拐や連れ去りの経験をもち子どもやその親たちで、NCMECの研修を受けたボランティアで構成されています。かつての当事者であるボランティアがファシリテーターとして実施するピアカウンセリングをはじめ、子どもと会えない親の心のケア、家族として再びともに生活をしていく上でのサポートなどを行っています。

昨年NCMECのソーシャルワーカー2名がISSJの事務所を来訪し、二国間をまたぐ面会交流支援などについて意見交換を行いました。そして今回の研修で再会することができました。今後もそれぞれの取り組みについて情報交換を行いながら連携していきたいと考えています。

NCMECのホームページ

<http://www.missingkids.com/Home>

What' New? ISSJの「今」をお伝えします

「この春大学生になります。私が夢をもてたのは、養子縁組のおかげです」



「彼はスポーツでも勉強でも活躍し、すばらしく成長しています。とても誇りに思っています」



年末から年始にかけて、ISSJが養子縁組を支援した家族からグリーティングカードが届きました。近年はEメールでの挨拶にとつて替わり、郵便の数は減少傾向。しかし子どもたち自身からの手書きのメッセージもあり、ソーシャルワーカーたちにとつては楽しみな季節です。子どもが成長するに伴い家族と表情、特に笑顔が似てくることには、いつもはつとさせられます。

養子縁組を支援した家族から 今年も近況を知らせる グリーティングカードが届きました



「彼を迎えて1年以上がたちました。最近友人から、はじめから家族だったみたいだね、といわれました。本当にかわいくやさしい子です。すばらしい経験をあたえられていることに、感謝しています。」



かつての難民申請者から

この春、ひとりのアフリカ出身の男性が日本で大学院を修了し、エンジニアとして働き始めました。ビジネス鞆に製本した修士論文を入れ、少し丈の長すぎるスーツを着て、ISSJまで報告にきてくれました。かつて難民申請中だった6年前、病院受診に際して相談を受けたのがISSJとの関わりの始まりでした。

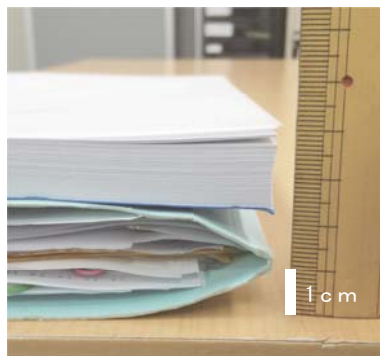
彼はもともと本国で専門教育を受け、エンジニアとして働いた経験を持っていました。ソーシャルワーカーが初めて彼に会った頃は英語での会話でしたが、難民申請者として直面する多くの困難を忘れるためか、ものすごい勢いで日本語の学習に取り組んでいました。その後、紆余曲折を経て、彼の意欲を認め支えてくれる大学の先生に出会い、研究生として受け入れていただきました。そして日本語で大学院入試を受験し、入学を認められました。

大学の先生もあきれてしまうほどの研究好きで、生活費を全て専門書につぎ込んでしまい、電気もガスも止められ、公衆電話から助けを求める電話を受けたこともありました。アルバイトと研究とを両立させる生活は容易ではなかったようです。不器用で正直な彼らしい言葉をご紹介します。

「学生となるまでは、正直自分のことで精一杯でした。たくさんの人に支えられる経験をして、人との関係の大切さを実感し、今は感謝しきれない気持ちです。これからいい仕事をするので、日本の社会に恩返しをしていきたいです。かつての自分と同じ境遇にいる若い人たちが希望をもてるよう、支援したいと思っています。」

これまで彼を見守り、支えてくださった皆様に、私たちからも感謝を申し上げます。

(重藤)



彼の持参した日本語で書かれた修士論文(上)と、ISSJで手紙や書類を保管してきたケースファイル。そろそろケースを閉じてもいいですか？

難民のコミュニティ支援



ISSJでは、日本に暮らす難民の方々のコミュニティを定期的に訪問し生活相談に応じています。都市部とは異なり、地方都市に暮らす難民の方々にとって、必要な支援にアクセスすることは容易ではありません。利用可能な資源が限定的であることや、支援を必要としている人を適切な支援に繋いでいく支援者やボランティアが少ないことがその理由としてあげられます。さらに、文化的要因や経済的要因など色々な要素が複雑に絡み合い、難民の方々が地域社会に溶け込むことが難しい状況が生まれていると言えます。

地域の特色や置かれた立場は様々ですが、私たちは、日本社会で暮らしていく上でどのような困難を抱え、どのような支援を必要としているのか、難民の方々と共に考え解決していくことが大切だと考えています。とりわけ、文化的・宗教的背景から社会との接点が少なく、孤立してしまう危険性が高いと考えられる女性たちの声に耳を傾けてきました。

群馬県に暮らす難民の女性たちとの対話を続けていくうちに、彼女たちが直面している課題の背景には、日本語学習の機会をうまく活用することができていないことや、子どもの学習に関する漠然とした不安感があることがわかりました。これらの課題の解消を目指して、現在、女性のための日本語教室と子どもたちの学習支援教室の立ち上げ準備を進めています。多くの方々の協力を得て、2017年中の開講を実現させることが出来そうです。

(近藤)

パレスチナ訪問記

石川 美絵子



ISSJでは日本に逃れた難民の支援を行っています。その中にはシリアやパレスチナなど中東出身者もいます。周辺国を含め、これらの地域は豊かな伝統と文化を持つ一方で、近代に入ってから度重なる戦争や紛争にさらされ、難民の流出や難民キャンプが増加しています。

ISSJが支援する難民の背景をもっと知りたいと思っていたところ、昨年9月にイスラエル・パレスチナを訪問する機会を得られました。イスラエルは1948年に建国されましたが、パレスチナを支援するアラブ諸国との対立が激化し、中東戦争（第1次〜4次）が起きました。オスロ合意を経てパレスチナ暫定自治区（ヨルダン川西岸とガザ地区）が成立しました。

西岸地区はパレスチナ自治政府の行政権・警察権に基づきA〜Cエリアに分かれています。トランプ政権発足により首都を移転するという話もありますが、首都はユダヤ教・イスラム教・キリスト教の聖地があるエルサレムではなく、テルアビブです。訪問ではエルサレムの他、ベツレヘム、ジェリコ、ヘブロンからナブルスまで西岸地区も回りました。

最初に印象づけられたのは、ライフルを持って町中を厳重に警備するイスラエル兵の姿です。イスラ

エル人には安心なのかもしれませんが、銃のある日常生活はかなり緊張感がありました。パレスチナ人が住む西岸地区に入るときは、検問所と分離壁を通過します。イスラエル人が西岸に入ることは禁止され、西岸IDを持つパレスチナ人もイスラエル側に入ることはできません。

壁を越えると喧噪のあるアラブ世界に入ります。商店やレストランなど町中にアラビア語があふれ、都会的なエルサレムからパレスチナ側に来たことがわかります。今回は国連(UNRWA)が運営する学校も訪問することができました。

複雑な歴史と感情的対立。分離壁によって分断された土地で、人々がささやかな日常生活を守るために日々格闘していると感じました。自治区ではイスラエルによる入植地(いわゆる土地の接収)も拡大しており、パレスチナ人は住居や仕事を失い続けています。しかしイスラエルにも、日本人には想像もつかない苦難の歴史があります。さらに、難民キャンプに暮らすパレスチナ難民(他国からパレスチナに逃れた人)と難民ではないパレスチナ人居住者との間にも軋轢があり、砂漠には遊牧民のベドウィンも暮らしています。

誰かを一方的に非難するのではなく、私たちは関心を持ち続けなければいけない、ISSJは信条に関わらず人々に寄り添った支援を続けなければいけないと強く感じました。



イギリスのアーティスト、バンクシーが壁に描いたストリートアート

映画会同時開催・チャリティバザーご協力企業 川崎フロンターレ・ショップ訪問



陸前高田発のおやつ昆布

昨年12月に、武蔵小杉にある川崎フロンターレのショップ、『アローズ・ネロ』へ伺いました。ISSJは2015年よりチャリティバザーへオリジナルグッズをご寄贈いただいています。川崎フロンターレは、入院児への定期訪問やオリジナル算数ドリルの市内小学校への配布など独自の活動を展開し、Jリーグ調査でも地域貢献度No.1という評価を得ています。東日本大震災後の陸前高田市とも友好提携を結んでおり、ショップには被災地を応援する製品が並んでいます。人と人との繋がりをスポーツを介して紡ぐ一貫した姿勢を感じました。

(重藤)



カンボジア・フンペン 寺子屋訪問



『大学へ進学して学校の先生になりたい』

2008年開所当時まだ幼かった子はもう高校2年生(写真左はお母さん)。寺子屋卒業後数年働き、最近結婚して出産した女の子もおり、マネージャーのVongさんがまるで孫の誕生のように、嬉しそうに写真を見せてくれました。(重藤)

2016年の年の瀬、ウナロム寺院内・ひろしまハウスの寺子屋を訪問してまいりました。昨年ISSJよりカンボジア人スタッフとNPO法人ひろしま・カンボジア市民交流会に支援を引き継いだ後、初めての訪問でした。その間規模を縮小しながらも、2人のスタッフが約30人の子どもの成長を見守っていました。

スタッフ紹介

近藤 花雪



昨年より事務局スタッフとして勤務しています。これまで、欧州とりわけドイツにおける移民・難民の統合政策を専門として研究を続けてきました。欧州に難民が押し寄せ、世界的に難民問題が注視されていた2015年夏、ドイツでの研究滞在を終え、帰国した私が直面したのは、難民という存在への認知があまりに低く、支援も乏しい日本社会の姿でした。ドイツでの経験を活かしながら、私にできることはないだろうかと模索している中、ISSJで働く機会をいただきました。まだまだ学びの日々ですが、日本国内で生きづらさを抱えながら暮らしている多くの人たちの想いに寄り添いながら、成長していければと思っています。どうぞよろしくお願ひ致します。

インターンのみた ISSJ

佐伯 賢



院同行や収容所訪問等の活動を行っています。母国では危険があり、庇護を求めて日本に來たにも関わらず、普通の生活をするこゝさえ認められない難民の方々の話を聴くたび、やりきれない気持ちになりました。しかしその中で、僅かでも精神的な支えになると支援をあきらめないISSJスタッフの方々に日々学ばせて頂いています。他では得られぬ貴重な経験をさせて頂き、ISSJの活動に少しでも貢献できるよう尽力したいと思っています。

昨年11月からインターンとして活動しています。大学ではソーシャルワークを専攻しています。ISSJのインターンでは、主に難民の方の通

イベントを開催しました

1月7日 Quartet SISLEY 新春チャリティコンサート

弦楽四重奏カルテット・シスレーにISSJの活動にご賛同をいただき、杉並公会堂にてコンサートを開催しました。第一部はチェロの加藤泰徳さんが進行役となつて曲の解説が入り、第二部はじっくりと音楽に聞き



『前菜、メイン、デザート付きのコース料理を食べたような満足感』(アンケートより)

入ることができる構成。最後にはシスレーオリジナル曲『Magic Children』が演奏され、好評のうちにコンサートを終えることができました。シスレーの門野由奈さん、桂川千秋さん、池辺真帆さん、加藤さん、ご協力ありがとうございました。会場アンケートをもとに新たにコンサートの企画をしています。

10月21日 チャリティ映画会・バザー

日本教育会館・一ツ橋ホールで開催した第73回チャリティ映画会『黄金のアデーレ～名画の帰還』&バザーには、850名の方にご来場いただきました。上映作品『黄金のアデーレ』は、以前から鑑賞を楽しみにされていた方も多く、上映終了後に会場から拍手が沸く場面もありました。またバザーでは作業所さんからの出展コーナーも ご好評をいただきました。このイベントでのご協力金は 1,896,226円となりました。お力添えいただいた企業・団体、個人の皆様へ、改めて御礼申し上げます。ご協力金は ISSJ の国際福祉活動のために活用させていただきます。



企業やボランティアの皆様からいただいた品物も販売

イベントのお知らせ

第74回チャリティ映画会『ストリート・オーケストラ』&バザー



(C)gullane

ブラジル・サンパウロを舞台に、ある音楽教師がスラム街の子どもたちと向き合い心を通わせ結成されたクラシック楽団誕生の実話をもとにした、エネルギーに満ちたストーリー。クラシックやブラジル人ミュージシャンによるラブなど、物語を彩る音楽にも注目の作品です。

同時開催のチャリティバザーには、複数の福祉作業所さんが出展。新宿福祉作業所のマフィンやベテルの家の昆布、アジアのフェアトレード品、婦人洋品、個人・企業からのご寄託品などを販売いたします。参加券のお申し込みの際は、ISSJ 事務所までご購入枚数、お名前、ご住所をお知らせください。皆様のご参加、お待ちしております。

ストリート オーケストラ



原題: Tudo Que Aprendemos Juntos
ブラジル 2015年
監督: セルジオ・マシャード
ポルトガル語/日本語字幕 103分

2017年6月3日(土)

10時開場 / 10:00 ~ 17:00 バザー同時開催

上映開始時間 ①11:00 ②14:30 ③17:00

日本教育会館 3階 一ツ橋ホール

参加券 1200円(全席自由・前売制)

ボランティア募集

チャリティ映画会バザーに関わっていただけるボランティアを募集しています。昨年は57名のボランティアさんにお手伝いいただきました。ISSJ 事務所までお気軽にお問合せください。

●企画準備

日時: 毎週木曜日 10 ~ 16 時のご都合のよい時間
場所: ISSJ 事務所(御茶ノ水駅から徒歩5分)
内容: 参加券発送、バザー品の準備など

●当日ボランティア

チャリティバザーの会場設営、販売係など。
特典として当日『ストリート・オーケストラ』をご鑑賞いただけます。



ISSJの国際福祉事業をご支援ください

ISSJの活動は、個人や法人の会員の皆様からの寄付や助成金によって支えられています。会員として継続的にISSJを支援していただく方法と、寄付で活動を支援していただく方法があります。皆様からいただいた会費や寄付はISSJの活動全般に使わせていただきますが、ご指定いただければ特定の事業への寄付も可能です。

●会員になる

年2回のニュースレター、事業報告書、イベント情報をお送りいたします。

個人・グループ会員 年1口: 5,000円(何口でも)

団体会員 年1口: 50,000円(何口でも)

●寄付する

ご寄付は税制上の控除を受けることができます。寄付領収書をお送りするため、ご住所・ご連絡先をお知らせください。

●モノで寄付する — ISSJの『お宝エイド』 —

ご不要となった貴金属、金券・テレカ、未使用切手、書き損じはがきなどを、ゆうパック・着払いにてお宝エイド受付センターまでお送りください。品名には「ISSJ宛『お宝エイド』」とご記入ください。査定額に約10%が上乘せされた金額が、ISSJに寄附されます。

▶ 会費・ご寄付のお振込先

・三菱東京UFJ銀行 中目黒支店 普通 0397932

・ゆうちょ銀行 00190-7-64911

加入者名 社会福祉法人日本国際社会事業団

▶ 『お宝エイド』ご送付先

お宝エイド 受付センター (東京都公安委員会 第303311208397号)

153-0063 東京都目黒区目黒 3-8-10

Tel: 03-5719-6665

お宝エイドはTMコミュニケーションサービス株式会社の登録商標です

* 昨年8月から12月のISSJ『お宝エイド』を通じたご寄付は、238,898円にのびました。ご協力、誠にありがとうございました。

ニュースレター編集部



なかなか簡潔に伝えにくいISSJの活動内容。スタッフみなで繰り返し話し合いながら、目下パンフレットの改訂を進めています。成果が少しでもニュースレターにも反映されていれば、と願っています。



チャリティ映画会で上映する映画は、会場でのアンケート結果や東急レクリエーション、岩波ホールのご担当の方からの助言等を参考に、ISSJスタッフが決めています。選定には時間がかかりますが、観ておくべき作品に出会う機会。昨年公開の「オマールの壁」や「歌声にのった少年」は、恋愛、青春を描くと同時に、パレスチナの現実を突きつけられる映画でした。

インターカントリー第52号 2017年3月31日発行

発行: 社会福祉法人 日本国際社会事業団

International Social Service Japan (ISSJ)

発行責任者: 石川美絵子

発行所: 〒113-0034 東京都文京区湯島 1-10-2

御茶の水K&Kビル 3F

TEL: 03-5840-5711 (代表) FAX: 03-3868-0415

E-mail: issj@issj.org URL: www.issj.org

